



『春をもとめて』

標 点

父の書棚

県教育庁文化財課長

小林 伸明



物心ついた頃からなぜか、私の部屋には父の書棚があった。子どもの自分の身長より高く、大きな書棚。そのほとんどが、歴史小説や古墳、城郭、街道など文化財に関連する書籍で埋めつくされていた。私が小学校高学年になった頃、父から「興味があったら読んでもいい」と言われ、最初に吉川英治の「新平家物語」を手にとった。「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり…」に始まる源平の波瀾万丈の物語だ。長編だが、現代から遠く離れた歴史の壮大なスケールを感じながら一気に読み進めた。そうして、いつの間にか父の書棚にある本を読むことが自分の趣味になっていた。

また、父は折に触れ、それぞれの歴史の魅力や、歴史から学ぶべきことを分かりやすく教えてくれた。民間企業を定年退職した後は、独学で吉備国や邪馬台国など古代史を勉強し、父の書棚は私が読み切れないくらい本が増えていった。そんな父も晩年は病気がちで入院を繰り返していたが、入院中も古代史の本を枕元に置き、最後まで文化財に対する熱い思いを持っていた。

現在の私の仕事柄、県内各地で地域の様々な文化財に関わったり、守り伝えていこうとご尽

力されている方々にお会いし、そのお話を聞く機会が多々ある。それらの方々に共通して窺われるのは、父と同じく、地域とそこで育まれた文化財に対する熱い思いである。今日の県内の豊かな文化財に触れることができるのは、こうした熱い思いを持った方々の不断の努力による恩恵であり、これらの文化財を次の世代に継承していくことは我々の責務だ。文化財は、これまでの歴史と風土の中で生み出された貴重な財産であり、地域の誇り、シンボルとして、もつと多くの人に認知されるべきであろう。そのためにも、県内文化財の価値を正しく、そして分かりやすく伝えるとともに、その魅力を積極的に発信し続けていかなければならない。そうすることがこれからの地域の再発見や新たな地域づくりにつながると考えている。

数年前に父はこの世を去った。「今を生きる自分たちが文化財を守り伝えていかなければ、将来の人たちは歴史を失うことになる」と父はよく言っていた。父の書棚から借りた本を就寝前に読むことが私の今の日課となっている。本の向こうから父の声が聞こえてくる、そんな気がしている。